

【論文】

ジェンダーから見る大学入試センター試験英語問題

佐藤繭香・土屋結城・伊澤高志・樫村真由・北 和丈・瀧口美佳

1. はじめに

大学入試センター試験（以下、センター試験）は、独立行政法人大学入試センターによって1990年から2020年まで、31年間行われてきた日本における大学入学のための共通試験である¹。この間の受験者の総数は約1700万人にも及び²、本試験の英語（筆記）の受験者総数は、15,953,471人であった³。18歳人口は減少してはいるが、英語（筆記）試験を受験した学生は平成7年（1995年）に50万人を突破して以降、平成20年（2008年）を除いて安定的に50万人以上を維持してきた【図1】。それだけの数の受験者に加え、これまで教育者もこのテキストを分析し、攻略を試みてきた。「現代の日本における英語像の一部がセンター試験によって形成されてきた」という認識はあながち間違いでもないであろう⁴。本論文は、こうした前提を共有するグループによる共同研究の一部である。

センター試験が、「現代の日本における英語像の一部」を形成してきたという問題意識のもと、これまで共同研究として2本の論文をまとめた。1本目の論文では、センター試験英語（筆記）の長文問題において他者とのコミュニケーションがどのように提示されているかを分析した⁵。2本目の論文では、センター試験の英語（筆記）問題をコーパス化し、年代ごとのセンター試験の比較をすると同時に、実用英語技能検定試験2級の問題とも比較した。その結果、平成元年（1989年）度告示版の学習指導要領（以下、平成元年度版）を参照し作成されたと推測されるセンター試験の英語（筆記）問題（1997年から2005年）に、それ以前の問題と比較して女性登場人物数（またはその言及数）の増加が見られた⁶。北・樫村他（2019）では、その変化について、「女子受験者数の比率増大に呼応している」のではないかという仮説をたてた⁷。

改めて【図1】のセンター試験の女性受験者数と男性受験者数の推移を確認すると⁸、1990年（平成2年）から1997年（平成9年）まで、女性受験者数は、毎年1万人を超えるペースで増加している。女性受験者数が20万人を突破したのは1996年である。しかし、1998年（平成10年）か

らその増加ペースは格段に落ちている。平成元年度版を参照し作成されたと推測されるセンター試験（1997年から2005年）は、1997年まで右肩あがり増加したセンター試験の女性受験者数に呼応しておきたと推測することは、確かにできるかもしれない。しかし、この仮説だけでは、平成元年度版を参照し作成されたと推測されるセンター試験の英語（筆記）問題における女性登場人物数（またはその言及数）の増加を説明しきれないだろう。

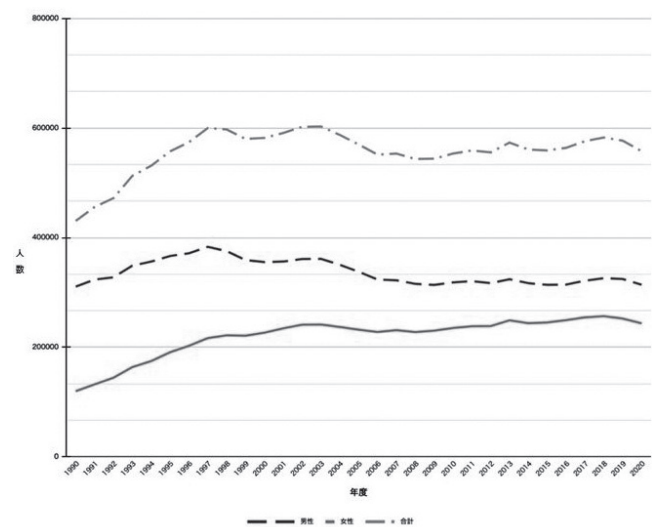


図1 本試験受験者数（総数および男女別）

では、センター試験英語（筆記）の作問者たちは、どのような意図を持って、問題文の女性登場人物数（またはその言及数）を増やしたのだろうか。ひとつ考慮すべきことは、日本が、1985年に女性差別撤廃条約を批准したことである。それにより、平成元年度版から、「性別の特性」や「男女の違い」についての記述が初めて消えた⁹。平成元年度版では、男女同一の学習課程が明文化され、中学や高校での家庭科の男女共修など、正規のカリキュラムにおいて改革が見られた。従って、センター試験の英語（筆記）問題の作問過程において、作問担当者たちが意識的に女性の登場人物を増加させたのかもしれないと推測することは

きる。残念ながら、作問作業については記録もなく資料も公表されていないため、1997年から2005年の作問の過程でどのような認識を共有し、どのような議論が英語（筆記）問題の作問担当者間でなされたのかについては知ることはできない。しかし、英語（筆記）問題に登場するようになった女性たちが、どのようなコンテキストで登場しているのかを分析することで、作問担当者たちが「性別の特性」や「男女の違い」の固定化にも配慮しつつ作問した可能性について考察できるだろう。それによって、センター試験英語（筆記）問題が「ジェンダー平等」にどう取り組んできたのか推測することはできる。

2. 先行研究とリサーチ・クエスチョン

そこで本論文では、31年間のセンター試験英語（筆記）問題を取り上げ、その問題の中に登場するようになった女性たちが、どのようなコンテキストで描かれているのか見ていきたい。つまり、彼女らが「性別の特性」や「男女の違い」に捉われず、「ジェンダー平等」の理念を体現した存在として問題の中に登場しているのか、あるいは、伝統的な性別役割を与えられているのかを分析し、センター試験英語（筆記）試験の31年間の歴史の中でその男女の描かれ方に変化はなかったのかを検証していく。そして、登場人物たちに「ジェンダー平等」の理念が垣間見られるようになったとすれば、それはいつ頃からなのかを可能な限り分析し、センター試験が、ジェンダーという問題にどのように向き合ってきたのか、31年間の変遷を辿ることを目的とする。それは、現代の日本の英語教育におけるジェンダー問題の扱いについて振り返る良い機会となる。

まずこの論文で、センター試験の英語（筆記）問題の中に「性別の特性」や性別役割分担の固定化が見られるかどうか注目していくにあたり、先行研究をおさえておきたい。

正規のカリキュラムをジェンダーから分析する研究においては、特に中高の「家庭科」、「保健体育」、そして性の問題も扱う「道徳」の授業が主に取り上げられている¹⁰。女性差別撤廃条約を日本が批准したのは1985年のことである。その第10条(c)では、機会の均等を保証するだけでなく、「男女共学その他の種類の教育を奨励することに」よって「男女の役割についての定形化された概念の撤廃」を求められた¹¹。つまり、男女の性別役割分担を固定化する教育を見直していくことが要求されているということになる。その条約の批准によって、前述したように、平成元年度告示版学習指導要領では、男女の教育内容の同一化が進められ、その一例として家庭科の男女共修が定められたが、そうした家庭科や保健体育、そして道徳といった科目における男女の教育機会の平等だけでなく、その中身、つまり「男女の役割についての定形化された概念の撤廃」をする教育内容となっているのかが研究されている。

日本における男女の性別役割分担に対する考え方は、学習指導要領にも影響を与えてきた。日本では、明治時代以降、西洋化し近代化が進められていく中で、女性は政治的

領域から排除され、公と私が区別された。近代家族が国家を支える単位と捉えられ、近代家族の中で男性には、公の領域、つまり、家庭の外で国家を支える働き手という役目を与える一方で、女性の役割とは、家庭における母や妻であるとされた。近代家族の形が確立していったのは20世紀に入ってからのことになるが、さらに戦後の高度経済成長期においては、男性中心の会社文化に伴い男性が主たる家計を担う社会が形成されていった。これにより、性別役割分担が強化されたと考えられている。こうしたジェンダー観は、昭和33年（1958年）告示版学習指導要領で家庭科が女子学生用の教科として定められたように、男女の特性が異なることを前提として男女別の教育が進められることによって、再生産された。それは、平成元年度版の改訂まで続いたとされる¹²。本論文も、この見解に則っている。

また、正規のカリキュラムではなく、「ジェンダーおよび、不平等なジェンダー・リレーションを再生産する機能」がある「かくれたカリキュラム」に関する研究も豊富である¹³。「かくれたカリキュラム」は、男女の不平等や固定化された男女の性別役割分担を学生に無意識のうちに植え付けると指摘されている。木村(1999)によると、「かくれたカリキュラム」である「学校文化」によって、学校がイデオロギー装置と化している¹⁴。「かくれたカリキュラム」研究の多くは、教科書などの学校で使用する学習教材のテキストやイラスト、出席簿や制服を「かくれたカリキュラム」としてとらえる。「かくれたカリキュラム」の実態を調査しようとするこれらの研究は、日本では特に1990年代以降活発になっており¹⁵、それは、女性差別撤廃条約に代表される、国際社会からの求めに応じてであったといえるだろう。

英語教育に関しては、「かくれたカリキュラム」として中学や高校で使用される英語教科書のテキストやイラストをジェンダーの視点から分析した研究がある。石川(2020)は、2016年の中学校英語教科書6種に登場する英語教員を調査したところ、男性の日本人教員は主に男性であり、ALTは「若く、生徒とよく似た趣味を持つ」女性として描かれていることが多いことを明らかにし、教科書の中に「個々人の中に潜むジェンダー・ステレオタイプ」があること、さらにそれを「知らず知らずのうちに次世代へと伝えてしま」っていることを指摘している¹⁶。また森住(2020)は、中学の各学年で使用されている英語教科書6種類と高校の「コミュニケーション英語Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」の教科書のうち30種類を選択し、教科書の題材のなかにジェンダーに関する題材が入っているか、そして実在の登場人物の男女の割合を調査するだけでなく、自分自身が作成に関わった中学教科書*New Crown*の1978年から2012年まで男女の割合や性差別や男女平等や女性の人権に関するトピックはどのくらいあるのかを調査している¹⁷。結果として、「ジェンダーの問題の扱いは不十分」であり、「スルー」されてきたことを指摘した¹⁸。

外国語検定試験のテキストをジェンダーから分析した研究では、仏検を扱ったものがあるとはいえ¹⁹、試験問題をジェンダーから分析した研究は少ない。本論文では、センター試験英語（筆記）問題を「現代の日本における英語像

の一部」を形成してきただけでなく、さらには現代日本における「男女の役割の定形化された概念」の形成の一助を担ってきたかもしれない「かかれたカリキュラム」のひとつとして捉えたい。その上で、本論文では、31年間でセンター試験英語（筆記）問題のテキストにおける性別役割分担の描き方は変化しているのかをリサーチ・クエスチョンとする。

3. 調査の手法

調査方法について述べる前に、まずセンター試験英語（筆記）問題が準拠していると推測される学習指導要領をおさえておこう。【表1】は、センター試験が準拠する学習指導要領を示している。学習指導要領は、「国が学校で教える内容や目標に関する事項を学年ごとに配列して示したものである」ため²⁰、センター試験が準拠する学習指導要領ごとに、センター試験問題の特徴を捉えていくことも可能であろう。そこで、センター試験英語（筆記）問題を分析するにあたり、該当する学習指導要領に準拠したセンター試験を整理しておく。

表1 センター試験が参照する学習指導要領

対応する指導要領	センター試験の年度
S53年度告示版（第1期）	1990（H2）～1996（H8）
H1年度告示版（第2期）	1997（H9）～2005（H17）
H10年度告示版（第3期）	2006（H18）～2015（H27）
H20年度告示版（第4期）	2016（H28）～2020（R2）

注：北他（2019）より一部転載

● 調査対象

次に、センター試験英語（筆記）問題のどの部分を調査対象とするのかについて説明する。この研究では、センター試験英語（筆記）問題全てを調査対象とはしない。調査対象とするのは、登場人物の性別役割分担や性別の特性を読み取ることができる文章問題、つまり、物語文のみとする。

センター試験英語（筆記）問題の問5と問6の文章問題の内容には、31年間の間に若干の変更があった。1990年から2007年の試験では、問5が説明文か会話文、問6は物語文となっている。2008年から2015年の間は物語文が出題されず、問5と問6は共に説明文である²¹。2016年から2020年の間には、物語と説明文の文章問題が再び2問出題されているが、問5が物語文、問6が説明文となっている（詳しくは【表2】を参照）。

本研究では、物語文のみを分析対象とするため、2008年から2015年の問題については分析対象から除外した。調査対象として、1990年から2007年のセンター試験英語（筆記）問題では問6を、2016年から2020年は問5を取り上げる。

● 調査方法

では、調査対象である物語文をどのように調査するのかについて説明する。まず、女性の登場人物が平成元年度告

示版学習指導要領を機にセンター試験英語（筆記）問題に登場したのか確認するために、以下の要領でデータをまとめていく。

1. 物語文から登場人物を抽出し、その性別を確認し、表にリスト化する。
2. 次に、物語文のあらすじから主役を判別し、その性別を把握する。上記のようにリスト化した登場人物の中で、主役には下線を引く。
3. 準拠する学習指導要領ごとにグループ化したセンター試験問題に登場した主役の性別（男性と女性とその他）の割合を算出する。

以上の1から3までを、表にまとめる【表2】。これによって、女性の主役が、実際に平成元年度版を境として数多く登場したのかを確認すると同時に、女性の主役と男性の主役の割合が、平成元年度版以降の学習指導要領に準拠したセンター試験英語（筆記）問題だけでなく、その後もどのような形で変化しているのか確認できよう。

その上で、各学習指導要領に準拠したセンター試験英語（筆記）問題の物語文の主役が、伝統的な男女の固定化された性別役割分担や男女の領域分離に基づいて描かれているのかどうかについて確認する。つまり、男性は公的な領域（家庭の外）で仕事に従事する一方で、女性は私的な領域（家庭）で母や妻などの役目を課せられているかをみていくということである。主役の判別については、センター試験英語（筆記）問題の物語文は、大部分が一人称で記述されているため、比較的容易である。三人称で書かれている問題は、物語の内容から主役を判断した。

4. 分析結果

調査方法に基づいて【表2】にまとめたセンター試験の物語文の特徴から、どのような男性像や女性像が読み取れるのかを分析していこう。センター試験は、学習指導要領に準拠していると考えられるため、昭和53年度（1978年度）、平成元年度（1989年度）、平成10年度（1998年度）、平成20年度（2008年度）告示版の学習指導要領に分けて、センター試験の特徴をまとめる。

● 主要登場人物の性別の比率

最初に、【表2】にまとめられた準拠する学習指導要領別にグループ化されたセンター試験問題の主要登場人物の性別の比率を確認しよう。

昭和53年度告示版学習指導要領に準拠したセンター試験英語（筆記）問題に出題された物語文の主役は、男性のみである。平成元年度版で「男女の特性」や「男女の違い」に関する記述が削除され、男女の教育機会の平等が整えられたと言われているが、確かに平成元年度版に準拠したセンター試験英語（筆記）問題では、それまで主役として扱われてこなかった女性が初めて主役として登場した。男女の主役の割合も1対2となっており、昭和53年度告示版学

表2

センター入試年度 表記年度	対応する学習指導要領	問題番号	物語文の概要	登場人物 (主役は下線)	主役の性別の比率
H2年(1990年)	S53年度告示版	第6問	物語(一人称)、芸達者なサルを預かることになった男性の物語	男性(私)、男性(Richard)、女性(3名: 1人はRichardの妻)、男性(警察官)	男性と女性の割合 7:0
H3年(1991年)			物語(一人称)、日本人高校生とアメリカ人女性の文通	男性(私)、女性(Margaret K)	
H4年(1992年)			物語(一人称)、アメリカからヨーロッパに一人で旅した息子をうらやましく思う父	男性(私)、男性(息子)	
H5年(1993年)			物語(一人称)、いつも家長の位置に座っていた父。今や語り手がその場所に座ることに。	男性(私)、男性(父)、女性(私の妻)、女性(母)	
H6年(1994年)			評伝(三人称)、1938年のダグラス・コリガンによる無着陸大西洋横断の顛末	男性(Douglas Corrigan)	
H7年(1995年)			物語(一人称)、コウモリが住み着いた納屋を持つ親子が家を貸すまでの顛末	男性(私)、男性(息子)	
H8年(1996年)			物語(一人称)、東京の骨董店で手に入れたフランスの絵のルーツを探る。	男性(私)、女性(店の店主)、女性2人(画家の娘たち)	
H9年(1997年)	H元年度告示版	第6問	物語(一人称?)、ニューヨークの電話ボックスで見つけた木製の猫をめぐる事件。	語り手の性別不明(Captain Bakerの友人)、語り手が語る物語の主人公は女性(Jane)、男性(Captain Baker/Janeの夫)	男性と女性の割合 1:2
H10年(1998年)			物語(三人称)、釣りをするふりをして一人の時間を満喫する男性。	男性(Old Fred)、女性(Kate/娘)、男性(Jim)	
H11年(1999年)			物語(三人称)、初めてのデートで母から匂うチーズの配達を命じられたミミの話	女性(Mimi)、男性(Robert/ボーイフレンド)	
H12年(2000年)			物語(三人称、手紙) 祖母の遺品のキルトがオークションにかけられるのを残念に思うサリー。	女性(Sally)、キルトを競り落とした人物(性別不明)、女性(祖母)	
H13年(2001年)			物語(三人称)、海に潜る試練を自分に課す少年ジェリー。	男性(Jerry)、男性(地元の子たち)、女性(母)	
H14年(2002年)			物語(一人称)、ポーランド出身の筆者がピアノを学ぶようになったきっかけとその後の成長について	女性(私: Eva)、女性(Ms.Grodzinska)、男性(友人の兄)	
H15年(2003年)			物語(一人称)、親の意向で幼少時にブラジルから日本へ移住したエレナが体験した摩擦と救い	女性(私: Elena)、女性(友人Natsumi、Makiko、Kaori)、女性(いじめっ子2名)	
H16年(2004年)			物語(三人称)、二人の水泳選手ケイトとアンジェラが軋轢を経て成功と友情を手にする	女性(Kate)、女性(Angela)	
H17年(2005年)			物語(一人称+手紙)、一人の少年のサマーキャンプでの成長物語	男性(Kevin)、男性(Tommy)	
H18年(2006年)			物語(一人称)、実家の隣に住む不愉快な老人に、語り手(女性)と同じ大学の学生(男性)が7年前助けられた。山に出かけた際、妹がけがをしたのを、不愉快な老人が医者まで車で送ってくれたのだ	女性(Sarah:語り手、話の聞き手) 男性(大学生)、男性(Mr. Peal:老人)	
H19年(2007年)	物語(三人称)、欧州旅行に行く19歳の孫娘にアドバイスを求められた祖父が、バルセロナの動物園にいたアルビノのゴリラについて話す	男性(祖父) 女性(Valerie:孫娘)			
H20年(2008年)	H10年度告示版	第5問	物語文なし		
H21年(2009年)			物語文なし		
H22年(2010年)			物語文なし		
H23年(2011年)			物語文なし		
H24年(2012年)			物語文なし		
H25年(2013年)			物語文なし		
H26年(2014年)			物語文なし		
H27年(2015年)			物語文なし		
H28年(2016年)	H20年度告示版	第5問	物語(一人称)、料理コンテストに出る叔父について	男性(私: Mike)、男性(John: 叔父)、男性(Johnの父)、女性3名(Johnの母と妹2人)	男性:女性:その他 2:2:1
H29年(2017年)			物語(一人称)、猫になって、人間である自分を客観視する夢を見たユウジ	男性(私: 猫、Yuji)、女性(母)	
H30年(2018年)			物語(一人称)、タコ型宇宙人が地球に来た	性別不明(私: タコ型宇宙人)	
H31年(2019年)			物語(一人称)、父が病気の間、娘が家庭菜園の世話をする	女性(Christine)、男性(父)、女性(母)	
R2年(2020年)			物語(一人称)、山で見失った愛犬を探しに山へ行くと、不思議な老人と会う。その後、愛犬と再会した。	女性(私)、男性(老人)	

*注記: 英文自体から性別が判別できない場合は、問いの代名詞から判断した。

習指導要領（以下、昭和53年度版）に準拠したセンター試験英語（筆記）問題に女性を主役とする物語文が出題されなかったことを埋め合わせるかのように倍に増えている。

平成10年度、20年度告示版学習指導要領（以下、平成10年度版と平成20年度版）に準拠したセンター試験では、男性と女性の主役は同数となっている。平成20年度版に準拠したセンター試験では、男性または女性を主役にした物語文は同数出題されているが、興味深いことに、2018年は男女の区別のないタコ型宇宙人を物語文の主役としている。この問題が出題された年にはセンター試験の英語問題に「宇宙人がでた」と巷で話題にもなったが、この問題が出題されたことで平成20年度版に準拠したセンター試験では、男女それぞれを主役とする物語文の同数を保つことができている。

次に、各学習指導要領に準拠したセンター試験英語（筆記）問題の物語文に登場する男女の主役がどのようなコンテキストで登場しているのか確認しよう。

● 昭和53年度告示版学習指導要領に準拠したセンター試験（1990-1996）

【表2】にある通り、この期間の試験の物語文に登場する一人称の「私（I）」は、全て男性であり、女性は、1991年の問6のように文通相手のアメリカの高齢女性、または、1993年の問題のように配偶者として登場するのみである。この期間のセンター試験英語（筆記）問題は、男性が主体の物語文で占められている。

そうした男性主体の物語文の舞台設定は、ほとんどが家の外である。そして、家の外で、1990年の問題のように、男性たちはヨットを運転するなど冒険的な行為に及んでいる。翌年の1991年の問題は、高校生の男性が大人になるまでの人生を辿り、1992年は世界に飛び出し一人旅をする息子を誇る父の物語、1994年は飛行機での太平洋横断、1996年は男性主人公がフランスまで絵のルーツを探りにいく。このように、男性が家の外で日常とは異なる「冒険」に出かけるという特徴が見られる。

舞台設定が唯一家庭となっているのは、1993年の問題であるが、この問題は、家庭の中の家父長制をテーマにしており、家庭内の父と息子の権力の委譲を食卓における椅子で表現している。父から息子に譲られた家のダイニング・ルームには「肘掛けがついた2脚の大きい椅子と肘掛けなしの4脚の小さな椅子」があり、大きな椅子はテーブルの両端においてあった。父は訪ねてくると、自分が家の主人であるかのように必ずテーブルの上座にある大きな椅子に着席するが、この物語の結末では、息子に家長の証明である上座の椅子を奪われる。息子を訪ねる際、父が一緒であれば母も大きな椅子に着席するが、父か息子のどちらかがいない場合は、母は権力の象徴であるその椅子には着席しない。「どちらか一方がいない場合、母は小さな椅子のひとつに座る」のである²²。つまり、母という存在自体には力はない。父がいる場合は、父の権力が母にもおよぶことで、彼女は大きな椅子に着席できるのであり、父がおらず息子のみの場合は、男性である息子に大きな椅子を譲って

いる。従って、繰り返しになるが、この1993年の問題は、家庭を舞台としていても、家庭の中における家父長制を描く物語となっているのである。

この1993年の物語文にも見られるように、父と息子の関係性というテーマもこの時期のいくつかの物語文に登場する。1992年と1995年の問題文がそれにあたる。ここで注目したいのは、どの物語文も父が息子の判断力や能力を認めるという設定になっており、母が不在だということである。母の不在は、男性中心の家庭、つまり家父長制に基づいた家族像を暗示すると指摘することができる。

● 平成元年度告示版学習指導要領に準拠したセンター試験（1997-2005）

この期間の英語（筆記）試験における物語文では、主役として女性の登場が男性の2倍となった。しかし、数だけを見るのではなく、そうした女性たちが、どのような役割、特徴を持って描かれているのかということを見ていかなければならない。

この期間の英語（筆記）問題の中で、女性が主役となっている物語を見ていくと、2001年を境に舞台設定や主題が変わっていることを指摘できる。1997年から2001年の5年間の間に、女性が主役となった物語文は3問出題され、いずれも家庭生活の延長線上にある日常的な出来事を主題としている。

そのうち、1999年と2000年の物語文では女性が他人によって助けられる顛末が描かれている。1999年は、ボーイフレンドとデートに出かける女性ミミ（Mimi）が、匂いの強いチーズを知り合いに配達するように母に言われ、デート中もその匂いが体に染み付いたことに悩まされる。「何か臭う」と言われた主人公は、ボーイフレンドに庇われることによって、救われる²³。2000年の問題では、主役の女性サリー（Sally）が、祖母の遺品であるキルトを手に入れようとするが、競売では競り負けて手に入れることができなかった。ところが、最後に競り落とした人物から「競りに負けた時のあなたの悲しみは明らかで、私の心を打ちました」と書かれた手紙と共にキルトを譲られる²⁴。残念ながら、この人物の性別は明らかにはなっていない。このように二つの物語文では、女性の主人公は、他人からの助けを得て問題を解決する受動的な人物として描かれている。

また、1997年は、家の外で起こる盗難事件についての物語だが、この物語の主人公ジェーン（Jane）が1人で事件に遭遇するという内容にはなっていない。既婚者であるジェーンは事件に巻き込まれ、その事件の間中、彼女の側には夫が常に付き添っている。つまり、1997年から2001年までは、女性たちが物語の主役となっても、主体的に自分の力で何かを成し遂げた存在として描かれてはいない。昭和53年度版に準拠したセンター試験では、男性が家の外に「冒険」に出かける物語がほとんどであったことと併せて、1990年から2001年までは、活動的な男性と受動的な女性という伝統的な「男女の特性」に対する考え方や男女の領域分離の考え方が、具体的に表れているということ

はできないだろうか。

2002年から2005年のセンター試験に関しては、2002年、2003年、2004年が、女性を主役とした物語文となっている。そしてその物語文の舞台設定は、家の外である。それ以前までのセンター試験英語（筆記）問題の物語文と異なるのは、女性たちが家の外で、自らの力で主体的に何かを掴み取る話となっていることである。2002年は、主人公のエヴァ（Eva）がピアニストを目指し、17歳でコンサートを成功させる話であるし、2003年はブラジルから日本に移住し、新しい環境に曝されたエレナ（Elena）が主人公である。そして2004年の問題では、ケイト（Kate）とアンジェラ（Angela）という高校生の水泳選手が、ライバルとして切磋琢磨し、大会で優秀な成績を修め、奨学金を自らの力で手にする。いずれの物語文も、女性たちが、自らの努力や力で逆境を乗り越えている。エヴァ、エレナ、ケイトらは、明らかに2001年以前に描かれている受動的な女性たちとは異なっている。

では、1997年から2005年までのセンター試験が平成元年度版に準拠して問題が作成されていたのだとすれば、この期間の途中で、物語文に登場する女性像が変化した理由はどこにあるのだろうか。ひとつ考えられることは、1999年に男女共同参画社会基本法が施行されていることである。2000年には、男女共同参画基本計画が閣議決定され、「男女共同参画を推進し、多様な選択を可能にする教育・学習の充実」と「学校教育全体を通じて、人権の尊重、男女の平等、相互理解・協力についての指導の充実を図るとともに、教科書などの教材においても適正な配慮がなされるよう留意する」²⁵ことが定められた。「多様な選択を可能にする教育・学習」とは、つまり、男性と女性を一定の性別役割や特性や領域に閉じ込めるのではなく、そこから解放される男性像、女性像を目指すものと理解される。このことを一因として、「多様な選択」を掴み取る女性を暗示する作問が意識されたと推測することは十分に可能である。そして、その傾向は、平成20年度版に準拠したセンター試験で特に顕著となっている。

● 平成10年度、20年度告示版学習指導要領に準拠したセンター試験（2006年から2020年）

平成10年度版に準拠した英語（筆記）問題で分析の対象とできる物語文が出題されたのは、2006年と2007年の2年だけである。この2年の問題では、祖父と孫娘の関係（2006年は擬似的なもの）を描いている。

2006年の問題では、語り手のサラ（Sarah）は、隣に住んでいたピール氏（Mr. Peal）を不愉快な老人だと考えている。しかしサラは、彼が孫娘を見るような眼差しで自分を見ていたことを知る。2007年の問題は、語り手は祖父（男性）であるが、欧州旅行を計画する孫娘（Valerie）に自らの旅行経験を語って聞かせるという物語となっている。これらの問題は昭和53年度版に準拠した時期に見られた女性不在の家父長的な家族の物語から、抜け出したと言えるのではないだろうか。

加えて重要なのは、平成20年度版に準拠したセンター試

験英語（筆記）問題の物語文において、これまでの伝統的に固定化された男女の役割分担から脱却するような人物が登場することである。特に2016年と2019年の物語文にその変化が顕著となっている。2016年の物語文では、3名の男性登場人物が料理をする。主人公のジョン（John）は、「料理をするとき、常に幸せを感じ」ている²⁶。2019年の問題では、日本では女性に好まれる家庭菜園を趣味としていたが、今では病を患い無力な父親が登場する。一方で、母親は、ビジネストリップで外の世界を飛び回り、家庭菜園の世話をする時間はほとんどない²⁷。このように家庭的な料理や家庭菜園を楽しむ男性と外でバリバリ働く女性の登場は、センター試験が始まった当初の英語問題に出題された物語に見られる登場人物たちの性別役割分担が、31年間を経て逆転した形になったことを示している。

5. 終わりに（仮説）

最後に、ジェンダーから見る31年間のセンター試験英語（筆記）問題の変遷をまとめてみよう。

センター試験が、平成53年度版に準拠していた時期においては、物語文の主役は男性に限定されていた。平成元年度版に準拠したセンター試験英語（筆記）問題の物語文では初めて女性的主役が登場した。これは、1985年に日本が女性差別撤廃条約を批准し、平成元年度版から「性別の特性」や「男女の違い」に関する記述が削除されたためではないかと推測される。しかしながら、物語文に登場した女性たちは、2001年以前は受動的な存在として描かれており、伝統的な男女の性別役割分担に基づいたふるまいをしていた。2002年以後は、女性的主役は主体的な存在へと変化しており、それは、1999年の男女共同参画社会基本法とそれに基づいた2000年の男女共同参画基本計画の閣議決定に影響を受けたと考えることができそうである。

平成10年度および平成20年度版に基づいたセンター試験に関しては、男女の登場人物ともに固定化された性別役割からの解放が2年分の問題の中に見られた。2006年には教育基本法が改正され²⁸、第2条3号に「正義と責任、男女の平等、自他の敬愛と協力を重んずるとともに、公共の精神に基づき、主体的に社会の形成に参画し、その発展に寄与する態度を養うこと」を定めている²⁹。センター試験の問題の中に見られるようになった固定化された性別役割からの解放は、男女が平等である社会の「形成に参画し、その発展に寄与する態度を養う」ことの表れなのだろうか。31年間のセンター試験の歴史の中で、「ジェンダー平等」の片鱗が、平成20年度版に準拠するセンター試験の中にやっと見られたとするなら、センター試験という「かくれたカリキュラム」における「ジェンダー平等」の実現はまだ始まったばかりであったと言えるだろう³⁰。この「ジェンダー平等」の傾向が一時的なものではないことを確認するためには、2021年から始まった共通テストの分析も今後必要である。

- ¹ 2020年度の試験で大学入試センター試験は廃止され、2021年度より大学入学共通テストが行われている。
- ² この数は、本試験、追試験、再試験の受験者の総数である。大学入試センターホームページ上で受験者数が公開されている。<https://www.dnc.ac.jp/center/suii/index.html> (2021年2月11日)。
- ³ 「受験者数・平均点の推移(本試験)平成2～8年度センター試験」https://www.dnc.ac.jp/center/suii/h02_h08.html; 「受験者数・平均点の推移(本試験)平成9～17年度センター試験」https://www.dnc.ac.jp/center/suii/h09_h17.html; 「受験者数・平均点の推移(本試験)平成18～23年度センター試験」https://www.dnc.ac.jp/center/suii/h18_h23.html; 「受験者数・平均点の推移(本試験)平成24～26年度センター試験」<https://www.dnc.ac.jp/center/suii/h24.html>; 「受験者数・平均点の推移(本試験)平成27～29年度センター試験」<https://www.dnc.ac.jp/center/suii/h27.html>; 「受験者数・平均点の推移(本試験)平成30年度～令和2年度センター試験」<https://www.dnc.ac.jp/center/suii/h30.html> (アクセス日: 2021年3月5日)。以上から英語(筆記)受験者数の合計を算出した。
- ⁴ 北和丈、櫻村真由、伊澤高志、佐藤蘭香、瀧口美佳、土屋結城「大学入試センター試験が映し出す英語一電子コーパスとして読む英語問題」『実践英文学』71、2019年、p.92。
- ⁵ 土屋結城、伊澤高志、櫻村真由、北和丈、瀧口美佳、佐藤蘭香「コミュニケーション、経験、言葉: 文学テキストとして読む大学入試センター試験」『実践英文学』70、2018年、pp.21-38。
- ⁶ 北和丈、櫻村真由、伊澤高志、佐藤蘭香、瀧口美佳、土屋結城「大学入試センター試験が映し出す英語一電子コーパスとして読む英語問題」『実践英文学』71、2019年、pp.91-110。
- ⁷ 北和丈、櫻村真由、伊澤高志、佐藤蘭香、瀧口美佳、土屋結城「大学入試センター試験が映し出す英語一電子コーパスとして読む英語問題」『実践英文学』71、2019年、p.107。
- ⁸ 平成2年度から19年度までの男女別の受験者数のデータは、大学入試センターより提供を受けた。平成19年度から令和2年度は、大学入試センター試験のホームページ「過去の試験情報」の平成20年度試験から令和2年度試験の「都道府県別男女別志願者数増減」より抽出。https://www.dnc.ac.jp/center/kako_shiken_jouhou/index.html (アクセス日: 2021年3月5日)
- ⁹ 寺町晋哉「ジェンダーの視点からみた新学習指導要領」『宮崎公立大学人文学部紀要』第25巻、第1号、2018年、p.114。
- ¹⁰ 岸澤初美「学習指導要領に見るジェンダー言説—1958～2008年の改訂道徳学習指導要領の変遷から」『女性学年報』37、2016年、pp.131-166; 寺町晋哉「ジェンダーの視点からみた新学習指導要領」『宮崎公立大学人文学

部紀要』第25巻、第1号、2018年、pp.105-121; 藤田昌子「家庭科教育における男女共同参画社会の実現に向けた学習内容の課題: 一高等学校家庭科教科書の分析に基づく考察—」『日本家庭科教育学会大会・例会・セミナー研究発表要旨集』51(0), p.5; 勝木洋子、足立まな、北野聡子、杉本智美、寺田奈央、福山香織、藤村公代「教科の中へ隠れたカリキュラム—ジェンダー平等の視点から見た道徳教科書の分析—」『教職課程・実習支援センター研究年報』3、2020年、pp.23-34。

- ¹¹ https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/josi/3b_003.html (2021年3月13日)。女性差別撤廃条約は、国連では1979年に採択された。
- ¹² 「近代家族」『よくわかるジェンダー・スタディーズ』木村涼子・伊田久美子・熊安貴美江編著、ミネルヴァ書房、2013年、pp.50-51; 「家族とジェンダー」『よくわかるジェンダー・スタディーズ』木村涼子・伊田久美子・熊安貴美江編著、ミネルヴァ書房、2013年、pp.76-77; 木村涼子「ジェンダーの視点でみる現代の教育改革」『ジェンダーで考える教育の現在—フェミニズム教育学をめざして』木村涼子・古久保さくら編著、解放出版社、2008年、pp.18-19。
- ¹³ 木村涼子『学校文化とジェンダー』勁草書房、1999年、p.27。
- ¹⁴ 木村涼子『学校文化とジェンダー』勁草書房、1999年、p.27。
- ¹⁵ 寺町晋哉「ジェンダーの視点からみた新学習指導要領」『宮崎公立大学人文学部紀要』第25巻、第1号、2018年、p.106。森繁男「解釈的アプローチによる試論—ジェンダーの『かくれたカリキュラム』をめぐって」『日本教育社会学会第41回大会発表要旨収録』1995年、pp.242-243; 森繁男「『ジェンダーと教育』研究の推移と現況—『女性』から『ジェンダー』」『教育社会学研究』第50集、1992年、pp.164-183; 宮崎あゆみ「学校における『性役割の社会化』再考—教師による性別カテゴリー使用をてがかりとして—」『教育社会学研究』第48集、1991年、pp.105-123; 氏原陽子「隠れたカリキュラム概念の再考」『カリキュラム研究』第18号、2009年、pp.17-30; 氏原陽子「中学校における男女平等と性差別の錯綜—二つの『隠れたカリキュラム』レベルから—」『教育社会学研究』第58集、1996年、pp.29-45; 氏原陽子「意図的な隠れたカリキュラム」『名古屋女子大学紀要』59、2013年、pp.149-159; 木村涼子『学校文化とジェンダー』勁草書房、1999年などの研究がある。
- ¹⁶ 石川有香「日本の中学英語教科書に見る女性表象—男女共同参画社会を目指した英語教材研究—」『ジェンダーと英語教育—学際的アプローチ』石川有香編著、大学教育出版、2020年、1章、pp.38-39。石川は、他にも1999年の男女共同参画社会基本法が制定された前(1999年)と後(2016年)に使用された中学英語教科書を用い、法律が制定された結果、教科書の中の女性表象の登場割合と女性の発話数がどのように変化したかを調査している。最も採択率の高い*New Horizon English Course* (東京書籍)の中学1年生用教科書を比較した結果、1999年から2016年では、挿絵や写真における女性数は、48%から

51%に増加し、発話においても53%から63%に上がっていることを明らかにした。しかしながら、2016年に使用された4社による1年生から3年生の教科書の挿絵や写真を調査したところ、男性の方が女性よりも多く登場していることなどを指摘している。（石川有香「日本の中学英語教科書に見る女性表象—男女共同参画社会を目指した英語教材研究—」『ジェンダーと英語教育—学際的アプローチ』石川有香編著、大学教育出版、2020年、1章、pp.19-20。）

¹⁷ 森住衛「日本の中高の英語教科書に見られるジェンダー問題—題材の横断的・時系列的調査の試みを通して—」『ジェンダーと英語教育—学際的アプローチ』石川有香編著、4章。

¹⁸ 森住衛「日本の中高の英語教科書に見られるジェンダー問題—題材の横断的・時系列的調査の試みを通して—」『ジェンダーと英語教育—学際的アプローチ』石川有香編著、4章、pp.113-114。その他にも、英語教育とジェンダーに関する研究はある。2021年の『新英語教育』1月号のテーマは「英語教育とジェンダー」であった。佐久間和子「ジェンダーの視点を取り入れた授業—英語教育にジェンダーを—」『新英語教育』2021年1月号、pp.7-10; 「英語教科書をジェンダーの視点から分析する—その質的または数量的な偏りはないか—」『新英語教育』2021年1月号、pp.11-13。

¹⁹ フランソワ・ルーセル「ジェンダーから見た外国語検定試験—仏検の場合—」『大東文化大学紀要』57、2019年、pp.23-41。

²⁰ 岸澤初美「学習指導要領に見るジェンダー言説—1958～2008年の改訂道徳学習指導要領の変遷から—」『女性学年報』37、2016年、p.135。

²¹ この期間中、文章問題として物語が出題されなくなった理由は不明である。

²² 「1993年度センター試験英語」、第6問。『センター試験問題過去問研究 2015年度版』教学社より。

²³ 「1999年度センター試験英語」第6問。『センター試験問題過去問研究 2015年度版』教学社より。

²⁴ 「2000年度センター試験英語」第6問。『センター試験問題過去問研究 2015年度版』教学社より。

²⁵ 石川有香「日本の中学英語教科書に見る女性表象—男女共同参画社会を目指した英語教材研究—」『ジェンダーと英語教育—学際的アプローチ』石川有香編著、大学教育出版、2020年、1章、p.18。

²⁶ 「2016年度センター試験英語（筆記）」第5問。『センター試験問題過去問研究 2019年度版』教学社より。

²⁷ 「2019年度センター試験英語問題」第5問（https://www.asahi.com/edu/center-exam/shiken2019/mondai01day/english_05.html）（アクセス日：2021年3月10日）。

²⁸ 2006年の教育基本法の改正によって、旧教育基本法の第5条にあった「男女共学、男女は互いに尊重し、協力しあわなければならないものであって、教育上男女の共学は、認められなければならない」という条項は削除された。この点について、木村は、男女の進学率の格差をは

じめとした様々な課題が山積している中、「男女共学条項が歴史的役割を終えたとは到底言えない」と指摘する。（木村涼子「ジェンダーの視点でみる現代の教育改革」『ジェンダーで考える教育の現在—フェミニズム教育学をめざして』木村涼子・古久保さくら編著、解放出版社、2008年、pp.12-13。）

²⁹ 「改正前後の教育基本法の比較」

https://www.mext.go.jp/b_menu/kihon/about/06121913/002.pdf（アクセス日：2021年3月5日）

³⁰ 本論では、英語（筆記）試験の物語文のみを取り上げている。英語（筆記）試験の物語文以外、また国語問題もジェンダーという分析軸を用いた検証が必要であろう。しかしながら、この研究は、センター試験の作問者や作問過程の資料は公表されていないという点で、資料的な限界があることを付け加えておきたい。